

第1回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

# 「ちびときつねとおばあちゃんと」

岩手県立不來方高校三年 昆ちひろ



賢治のまちから  
高校生★童話大賞



賢治のまちから  
高校生★童話大賞

『ちびときつねとおばあちゃんと』

岩手県立不来方高校 三年 昆 ちひろ

「おばあちゃん、お話して。」

わたしは、夜ベットに入ってから眠るまでの間おばあちゃんがしてくれつお話が大好きで、その日もふとんの中からお願いした。

「そうねえ。」

部屋のカーテンをすっかり閉めてしまうと、おばあちゃんはわたしの横に座って笑った。

優しいやさしいおばあちゃん。

大雨の夜も、遠くで雷が鳴っている夜だって、おばあちゃんがとなりにいてくれれば、それだけで安心できる。きれいなお姫様の話も、片目がエメラルドの猫の話も、おばあちゃんが教えてくれたものだ。

「きつねとうさぎのお話は、まだしていなかったね。」

わたしがうなずくを見ると、おばあちゃんはそっと目を閉じて話し始めた。



賢治のまちから  
高校生★童話大賞

「これは昔、おばあちゃんのおばあちゃんが、金色の目をしたわたり鳥に聞いたお話―」

ある山奥の森の草むらの中で、小うさぎのちびはお腹がすいて、目が覚めた。

ちびはゆっくり起き上がると、食べ物を探して周りを見回した。少し先に食べられそうな草を見つけると、疲れの残る足でのそのそと歩き出した。

ちびは、ひとりぼっちだった。

味のない草をかみながら、ちびはお父さんとお母さんとはぐれたときのことを思い出して少し震えた。やさしいお母さんとかしいお父さん、そしてちびが数日前、草原でごはんを食べているときのことだ。

急に黒くて大きなおおかみたちがおそってきたのだ。胸をかまれて、その毛を赤く染めたお母さん。

何倍もの大きさのおおかみに体当たりをして、必死でちびに「逃



げろ」と叫ぶお父さん。

―それが、ちびが覚えているお父さんとお母さんの最後の姿だった。

お父さんの声がだんだん小さくなっていくのを後ろに聞きながら、ちびはめちやくちやに走った。おおかみたちが通れないようなしげみの間を、前教えられたように、においが、足跡が、残らない、ように、走って、走って―

どれ位の距離を走ったのか、どの位の時間が経ったのか。ちびの足はしびれ、ちぎれそうに痛んだ。ぼんやりとしてくる頭を何度もふりながら、走った。止まっちゃだめ、少しでも走るのをやめたら、後ろから…後ろから…？

何かおそろしいものに追われていたのは覚えている。けれどそれは一体何だったろう。そしてぼくは―どうしてひとりぼっちで逃げているのだろうか…。

ちびはひどい疲れで訳が分からなくなっていた。けれど、何も分からない、何も考えられないはずなのに、ちびの目からはとめどなく涙があふれた。

その涙が何なのか、ちびには分からなかったけれど、何だかあ



賢治のまちから  
高校生★童話大賞

ったかくて、ちびは少し安心した。ゆっくりと立ち止まるとそのまま、くずれおちるように深い眠りにつくのだった。

「おい。」

草を食べながら考え事をしていたちびは、突然後ろから聞こえた声に飛び上がった。

見るとすぐ後ろに一匹のきつねが立ってこちらを見ている。

「う、わあっ」

慌てて逃げようとする

が、足がもつれて転んでしまう。そうしているうちに、きつねはちびのすぐ目の前にやってくると、冷たい目で品定めをするようにちびを見下ろす。

「た、助けて…食べないでっ」

きれいな金茶色の大きなきつねの前では、やぶであちこちを切ったりどろの中につっこんだりですっかり薄汚なくなった自分はとても小さなものに思えた。

恐怖で固まるちびに、きつねがかけた言葉は思いけないものだった。



賢治のまちから  
高校生★童話大賞

「…お前ひとりか？」

きよとんとするちびにきつねは続ける。

「うさぎはたいてい集団でいるもんだろ。何でお前みたいなちびすけが一匹なんだ？」

きつねがすぐにはちびを食べる気がないようにだと気付くとちびは小さな声で答えた。

「ぼく、お父さんとお母さんとはぐれちゃったの…。」

きつねはふん、と鼻を鳴らすと急に興味をなくしたように少し離れた木の下で丸くなると、目を閉じた。

ちびは訳が分からなくなってきつねを見つめた。とりあえず安心しているのかな。それとも今はお腹がすいてないだけなのかも。ぼくが子供だからいつでも食べられると思ってゆだんしているのかも。

きつねが目を閉じたままなのを確かめると、ちびはこっそり逃げようと、しげみからはい出した。

しかし、足音をたてないようにしたのにも関わらず、三歩と歩かないうちにきつねが声をかけてきた。

「ここを少しあがった 辺りにおおかみが住んでいる。」



賢治のまちから  
高校生★童話大賞

「…。」

たった今のぼうろうとしていた坂道を見て、ちびはぞっとした。

「ほ、本当に？」

おそるおそる振り向くと、きつねはちびの方も見ずに、あくびをした。

「近くに川があるから、この辺なわばりと

か多いんだよなあ…。」

ひとり言のようにつぶやいた。

「きつねとか、くまとか。」

きつねが再び目を閉じたのを見て、ちびはすごすごとしげみに戻った。

さっきの話は本当だろうか。この辺りがおおかみの活動範囲なのだったらうかつには動けない。けれどきつねだって同じように危険なんじゃないか。

―そもそもこのきつねは一体何をしているんだろう。

ちびがその疑問をやっと口にしたのは、日が落ち、辺りが暗くなってからだった。

「ねえ」



賢治のまちから  
高校生★童話大賞

それは本当に小さな声だったけれど、きつねは薄く目を開けた。

「…ぼくを食べたり…しないの？」

きつねは面倒そうに口を開く。

「食べられたいのか？」

「たっ…や、そんなことはないけれど、もちろん。」

あわてるちびの言葉をさえぎってきつねは続ける。

「お前みたいなやせっぽちのちびなんか、腹の足しにならん。でも、」

きつねの細い目がかすかに光る。

「お前を探しに親が来るかもしれないな。」

ちびは、きつねの言ったことの意味を考えて青ざめた。ぼくはおとりなんだ、こいつは、ぼくを探しにきたお父さんとお母さんを―

「お父さんとお母さんを食べる気なの！」

ぱっとたち上がったちびに、きつねは低く笑った。「さあな。」

ちびは笑い声に数歩後ずさると、回れ右をして走り出した。だめだ、こいつと一緒にいたら、お父さんとお母さんがあぶない。

―しばらく走ったが、きつねは追ってきてはいないようだ。





賢治のまちから  
高校生★童話大賞

ほっとするちびの耳に、ふいに水の音が聞こえた。そういえば近くに川があるんだっけ、急にのどのかわきをおぼえたちびは、水音の方へと向かった。

木々や草がとぎれ、明るい月の光がまっすぐに届く、ひらけた場所を、川は流れていた。流れはあまり速くないが、ひどく冷たい。ちびは何度かに分けて少しずつ飲むと、すっかりひえてしまった口を手の毛でなでた。体のしんからひえていくような気がして悲しくなる。―また泣いてしまいそうだ。

―と、森の中の方から何か物音が聞こえた。慌ててかくれようとして、ちびはしまった、と思った。川の周りには木など生えていない。身をかくすどころか、森の方から丸見えだ。

森の中へ戻らなければ―ちびが地面を強くけったのと、草むらから黒い犬が飛び出してきたのは、同時だった。

二匹の距離はたちまち縮まり、ちびには背後にせまる犬の息づかいまでが聞こえた。走らなければいけないのに。ちびの足は恐怖にこわばり、ますます犬が近付く。

「うあっ」



賢治のまちから  
高校生★童話大賞

岩に足をとられ、体勢をくずしたちびに犬は前足をふりあげた。

ちびがぎゅつと目を閉じたその時――

どつ

背後で何かがぶつかり合う音が聞こえ、犬の気配が、「ぎゃつ」という叫び声とともに、消えた。

「え…?」

驚いたちびが振り向くと、そこんは月の光と同じ、美しい金色のきつね――

さつきわかれた、いじわるなきつね――が立っていた。

「あ…何で?」

ちびにきつねが言おうと口を開いたとき、ふつとばされた犬が体を起こした。

きつねは犬の体当たりをかわすと、ちびにさげんだ。

「行け!」

はじめられたように走り出すちび。その後ろではきつねと犬がにらみあっていたが、きつねの方が大きく強いのはあきらかだった。

「おい。」



賢治のまちから  
高校生★童話大賞

川からはなれたしげみの中で丸まっていたちびは、聞きおぼえのある声に、顔をあげた。

「何で…？」

聞きたいことは山ほどあった。ありすぎて何から言えばいいのかわからなくなる。

口ごもるちびに近づくと、きつねは身をかがめた。

「…血のおいがするんだよ。」

訳がわからず首をかしげるちびにきつねはもう一度言う。

「自分じゃきづかないんだろうが、お前、血のおいがする。少し鼻のいいやつだったら、かくれてたつてすぐ見付けちまう。」

ちびが自分の体を見回すと、たしかに最初に走ったときできた傷がたくさんある。ほとんどの傷口はかさぶたになっていたが、まだかたまっていなかったり、かさぶたがはげたりで血がにじんでいる傷もある。

ちびが傷をなめるのを見ながら、きつねはあくびをすると、ちびの横にねころんだ。ちびはなめるのをやめてきつねを見たが、きつねはおかまいなしで目を閉じた。そうしてころんとねがえりをうつと、ちびに背中を向けた。



賢治のまちから  
高校生★童話大賞

傷をなめ終えたちびは、おそるおそるきつねの横にねころぶと言った。

「どうして助けてくれたの？」

きつねは背中を向けたままで

「助けたふりをして、ゆだんしたところを食っちゃまうのかもな。」  
と言った。

「…そうなの？」

「でも今は、ねむいからねる。」

きつねの背中はお父さんやお母さんの背中とはずいぶん違ってたけれど、少し似ている、とちびは思った。やっぱり変な気持ちは続いていたけれど、もうこわくはなかった。

ちびは少し安心して、目を閉じた。

「んー…。」

朝になり、ちびが目をさますと、となりにきつねの姿はなかった。驚いて飛び起きて、まわりを見回したちびは、足元に昨日はなかった赤い木の実がなっている木は一本もない。

ちびは首をかしげ、食べられるのかと調べるために赤い実のに



賢治のまちから  
高校生★童話大賞

おいをかいだ。

くんくんと何度か鼻を動かして、大丈夫そうだと顔を上げたとき、何だかさつきと違うにおいが空気にまじっているのにちびは気づいた。

「何だろう。」

いやな予感がした。少し前にかいだことあるにおいだ。

「…血のにおい？」

ちびはとたんに不安になって、そっとにおいをたどって歩き出した。

少し歩いただけなのに、においはどんどん強くなる。近い…。

ちびは足音をたてないようにゆっくりゆっくり歩く。いやな気分もどんどん強くなっていく。

血のにおいと同じ方向から、かすかなうめき声が聞こえてちびは足を止めた。すぐ近くだ…それよりも、この、声…？

がまんしきれなくなって飛び出したちびが見たのは、見なれた金色のきつねがたおれている姿だった。

うしろ足を、黒ずんだ銀色の金具ががちりとはさみ、そこから赤い血が流れている。前にお父さんに教えてもらったことがあ



賢治のまちから  
高校生★童話大賞

る。人間がしかけたわなだ。

「ま、待ってて、今、」

ふらふらと金具に近づくちびを、きつねはにらみつける。

「来るなよ。血がつくぞ。」

声に力がない。「…ちびすけがどうにかできるもんじゃない。」

きつねの言葉にかまわず金具を開こうとするが、ちびの力ではびくともしない。それどころか、下手に動かすたびにきつねが痛がっているのがわかった。

あきらめてきつねの顔のそばへまわったちびは、きつねの手元に赤いものを見つけた。

「これ…」

ちびが起きたとき足元に落ちていたあの木の实だった。

「…きつねさんだったんだ、これとってきてくれたの。ぼくのた

めに…」

ちびの目から涙がこぼれた。

「ぼくのせいで、それ…わなに…」

ちびの声をさえぎるきつね。

「違うね。誰がお前なんかのために。」



賢治のまちから  
高校生★童話大賞

そう言うどゆっくり顔をうごかしてちびの方を向く。

「はやく、どっかに行っちまえ。」

きつねの冷たい言い方にちびは少しひるんだが、動こうとはしない。きつねは声を低くして、

「食っちまうぞ。」

と言ったが、ちびはぼろぼろ泣きながら首を横にふるばかりだ。

「お前が気づいたくらいだ。他の動物だつてとつくに血のにおいに気づいているだろう。来るんだ犬とかおおかみとかが。」

「じゃあ、きつねさんひとりじゃどうしようもないじゃないか！」

「お前がいたつて同じ事だ！じゃまなんだよ！」

「じゃ、ぼくを食べればいいだろ！」

ちびのさけび声にきつねはあつけにとられてだまりこむ。

「じゃまなら、食べちゃえばいいだろ。…そうすれば少しは元気になるかもしれないよ…。」

「…お前なんか食ったつて腹の足しにならないって言ったろ。」

きつねがぼそぼそと言う。

「…親が来るかもしれないだろ。」

ちびはきつねから目をそらさずに話し始めた。



賢治のまちから  
高校生★童話大賞

「ぼくのお父さんとお母さん、おおかみにおそわれたの…。もひろん、今も、生きてる…と

思うけど…けがしたみたいだから、ぼくのところに来るにはまだ時間がかかると思うんだ。だから…きつねさん血がいっぱい出ちゃったし、お父さんたち、間にあわないかもしれないし、ぼく、あんまりおいしくないかもしれないけど…どうせ、こんなちびで、一人じゃ生きてけないみたいだし…えーと…」

きつねはそつと口をちびの前足に近づけた。

「うん…。」

何といえばいいのか分からなくなったちびは、何となくうなずいた。

しかしきつねはそつと舌を出すと、ちびの足についた血をなめるだけだった。

「…血のおいがついちまったただろ。」

ちびは、昔お父さんやお母さんが、ちびの体の汚れをなめてくれたのを思い出した。

「…ぼくを食べたりしないの？」

ちびはきつねに一番はじめに言った言葉を、言った。





賢治のまちから  
高校生★童話大賞

きつねは足元を見たまま、ゆっくりと首を横にふった。ちびの足にあついものが落ちた。

きつねの、涙だった。

おばあちゃんが口を閉じたので、わたしは少しあわてて言った。

「それから？それから、ちびときつねさんはどうなったの？」

おばあちゃんは優しく笑った。

「ちびときつねさんのお話はこれでおしまい。…季節が変わって、金色の目をしたわたり鳥は、違う国へと飛んでいってしまったんだよ。」

「えーっ。」

ふくれるわたしを、おばあちゃんはそつとなでて言った。

「次の年、わたり鳥は森中をさがしたけれど、ちびときつねさんを見つめることはできなかったの。でもね、」

おばあちゃんはわたしのふとんを、そつとかけなおす。

「すっかりさびてしまった金具は見つけたの。そこには、今まで見たことのない美しい金色の花と、小さな白い花がよりそって咲



いていたそうだよ。」

おばあちゃんはそっと明かりを消した。

「おやすみなさい。よい夢を。」

わたしは真っ暗な部屋のベッドの中で、ちびときつねさんと、

おばあちゃんの手のあたたかさを思っ、ほんの少し泣いて、そ

してねむった。

夢の中で、金色の目のわたり鳥に会った気がした。